

電子掲示板を利用した日本語学習者による通信活動報告

下 平 菜 穂

キーワード：コンピュータ・リテラシー、プロジェクト・ワーク、学習リソースとの接触、
通信活動、電子掲示板

要旨

コンピュータ・リテラシーはアカデミック・スキルの一部として大学でも必要である。信州大学留学生センター日本語研修コースでは、これまでコンピュータを使ったいくつかの活動を授業の中に組み込んできた。平成15年度のコースでは、日本語学習者が授業外でも学習リソースと接触することを期待して、電子掲示板による通信活動をプロジェクト・ワークと組み合わせて行った。その結果、電子掲示板上で日本語学習者と学習支援者との1対1の通信活動が起こり、特定の読み手がいることが日本語環境下でコンピュータを使用する動機を高め、結果的にスキルを向上させた。

1. コンピュータ・リテラシーの重要性

情報化された現代社会においては、コンピュータ・リテラシー^{注1}は重要であり、大学においても、コンピュータを扱うスキルはアカデミック・スキルの一部として欠かせない。

独立行政法人メディア教育開発センターが実施した調査^{注2}によれば、図書館のデータベース化、WWWへアクセスして資料を収集させる授業、電子メールや電子掲示板による学生とのやりとりなど、多くの大学で、電子機器の教育への活用が進んでいる。日本の大学や大学院で学ぶ留学生も、日本語環境下でのコンピュータ・リテラシーを高めていく必要がある。

信州大学留学生センター日本語研修コース（以下、研修コース）ではこれまで、コンピュータを使ったいくつかの活動を授業の中に組み込んできた。ワープロ・ソフトを使った作文や、文集、新聞等の作成、プレゼンテーション・ソフトを使った発表、オンライン辞書等のウェブ・ツールの利用、インターネットを使った情報の収集、表計算ソフトを使ったグラフの作成などが挙げられる。指導内容に関する体系的なシラバスは今のところ作られていないが、日本語環境下でコンピュータを使うことも、日本語教育の一部だと捉えられていると言える。

日本語学習者（以下、学習者）のコンピュータ・リテラシーの高さは、その出身国や地域、経験等によって、様々である。大学における学習者は、コンピュータを利用するスキ

ルをある程度持っている場合が多いが、中にはコンピュータを使用した経験が全くない学習者もあり、自国でコンピュータを使った経験があっても、日本語入力に困難を感じる学習者も多い。そのようなコンピュータ・リテラシーの低い学習者に対しては、スキルを身につけさせ、日本語環境下でコンピュータを使おうとする動機を高めていく必要があると考えられる。

平成15年度の研修コースの授業では、コンピュータ・リテラシーの低い学習者にスキルを身につけさせることと、日本語環境下でコンピュータを使おうとする動機を高めること、また、学習者がインターネットを通じて日本語話者と接触することを目的として、電子掲示板での通信活動を行った。

2. 活動の概要

2-1. 活動の意図

教師が学習について考えるとき、その「学習」とは授業場面での学習に限られがちであるが、実際に学習者は教室の中だけで学習しているわけではない。授業以外の時間、教室以外の場所でも学習者は学習リソース（田中・斎藤、1993）と接触し、学習が成立している。授業を全く受けることなく日本語を習得する学習者もいる。レイヴが指摘するとおり、どのような活動の中にも“learning is ubiquitous”（Lave, 1993）なのである。

教師を含めた学習支援者は、学習者と学習リソースの接触をデザインする（石井他、2003）、あるいは学習者と学習リソースを含む学習環境をデザインする、といった形で、授業以外の学習場面にも、関わっていくことができるだろう。

平成15年度後期の研修コースの授業では「ネットで自己紹介」というプロジェクト・ワークを行った。これは、授業後に学習者がインターネットを活用してコース外の学習リソースと接触することを意図したものである。授業ではウェブサイトに掲載する自己紹介文を書くという活動を行い、授業後に学習者が日本語話者と接触するための電子掲示板を設け、電子掲示板への書き込みの依頼と呼びかけをすることで、授業外での学習リソースのデザインを試みた。

プロジェクト・ワークという学習活動は、母語話者との接触の時期によって成果発表型・調査型・共同作業型（田中・斎藤、1993）に分類することができるが、このプロジェクトは、学習者だけで何かしらの活動を行った後に発表を行う、成果発表型のプロジェクトである。成果発表型ということばは、プロジェクトの中で発表活動を行う場面で学習者が日本語母語話者と出会うことを意味しているが、ここではむしろ、プロジェクト終了後に電子掲示板を通じて学習者と学習リソースの接触が起きることを期待した。

2-2. 活動の参加者

活動に参加したのは、平成15年度後期研修コースの、初級後半以上のレベルの学習者で、プロジェクト・ワークの授業に参加した4名。いずれもアジアの漢字圏からの留学生であ

る。プロジェクト・ワークの授業には、この4名の他、入門期の学習者5名も参加していた。

4名の日本語のレベルは、初級後半2名、中級1名、上級1名だった。コンピュータ・リテラシーは、コンピュータを使用することがない学習者が1名、メール・ソフトとワープロ・ソフトが一応使え、メール・アドレスを持っている学習者が2名、さらにプレゼンテーション・ソフトや表計算ソフトを自由に使いこなせる学習者が1名だった。各学習者の活動開始当時の日本語とコンピュータの能力のレベルは下の表1のとおりである。4名の学習者を、S1、S2、S3、S4とする。

表1：学習者のレベル

学習者	開始時の日本語	コンピュータ
S1	初級後半	使ったことがない
S2	初級後半	メールやワープロ
S3	中 級	メールやワープロ
S4	上 級	さまざまなソフトが自由に使える

2-3. 授業

単元名「ネットで自己紹介」

目標

- 1) コンピュータで日本語入力ができる。
- 2) ウェブサイトに掲載するための簡単な自己紹介文をワープロ・ソフトを使って書く。

授業展開

〈第1回 (1.5コマ)〉

- 1) 導入。教師が留学生センターのサイトを学生に見せ、ネットで自己紹介をしようと提案する。名前はハンドル・ネームを使うなど、形式を決定。
- 2) 動機付け。教師によって配付されたタスクシートにそって、ネット上にある他大学の留学生の自己紹介を読解する。
- 3) 日本語入力未習の学習者は入力方法を学習。
- 4) 自己紹介文をワープロで書く。焦点を絞って詳しい紹介をするよう、教師が励ます。
- 5) 書き終えたらフロッピーまたはEメールの添付ファイルで教師に提出する。教師はそれを「学生からの発信」サイトに掲載する。

〈第2回 (0.5コマ)〉

- 6) 互いの自己紹介を読んでフィードバックし合う。

上記のような授業を実施した。コースが開始して初めてのプロジェクトであり、それぞれが自己紹介を書くという個人プロジェクトであることを考え、教師主導の導入、動機づ

けを行った。ワープロ・ソフトを使って自己紹介文を書かせ、信州大学留学生センターのウェブサイトの「学生からの発信」のページ^{注3}に掲載した。

2-4. 授業後の活動

「学生からの発信」にフリーの掲示板をリンクさせ、「2003年後期日本語研修コース掲示板」（以下、「掲示板」）として、教師が管理人となって運営した。最新の書き込み10件が表示されるもので、広告の入っているものである。学習者とは面識のない日本語教師への書き込みの依頼、信州大学人文学部で日本語教育を副専攻としている学生たちへの書き込みの呼びかけ、その他の知人や留学生、プロジェクト・ワークの授業で出会った人々への書き込みの呼びかけなどを行った。

学習者に対しては、書き込みの方法を教え、外部の人からの初回の書き込みに対しては必ず返事を書くよう励ました。それぞれの学習者に宛てた初めての書き込みがあったときには、授業外の時間に返事を書く学習者を支援し、日本語をチェックして欲しいという依頼に応じて、それぞれの書き込みを送信する前にチェックした。

2回目以降の書き込みについては、コンピュータを利用した経験のない1名の学生に対しては、教師がサイトを開いて見せてやるなどしたが、他の学生に対しては、書き込みに戻事を書くよう励ます程度の支援にとどめた。

「学生からの発信」には、その後、プロジェクト・ワークの様子の写真と学生が作った壁新聞の記事を掲載した。時間及び技術的な問題から、学習者にサイトを作らせることはできず、学習者が書いた記事を教師が掲載するにとどめた。

なお、「ネットで自己紹介」から3週間後、試験的に、入門期の学習者5名を対象とした「ひらがなけいじばん」も開始した。こちらは授業時等に、教師の指導の下で書き込みへの返事を書かせた。

3. 学習者と学習支援者の通信の過程

3-1. 「掲示板」の書き込み

「掲示板」への書き込みは、44件^{注4}あった。教師による書き込みが8件、学習者による書き込みが14件、学習者以外の書き込みが22件だった。学習者と教師以外で書き込みをした人を、以下では学習支援者と呼ぶことにする。表2は、最初の書き込みがあった週から1週ごとの書き込み件数を表す。なお、この44件の外にもサイトの紹介等の広告が書き込まれることがあったが^{注5}、教師が削除した。

最初に自己紹介を読んだ学習支援者からの書き込みが続いてあり（1週目4件、2週目1件）、学習者がそれらの書き込みに対して返事を書いた（2週目6件）。学習支援者からの返事と、プロジェクト・ワークで知りあった別の学習支援者からの書き込みがあり（3週目3件、4週目3件）、学習者が返事を書き込んでいる（4週目3件、5週目3件）。さらに学習支援者からの返事が書き込まれたが（6週目3件、7～8週目2件）、ちょうど冬休み直前の試験の前日から冬休みにかけてになった。学習者は、この期間は「掲示板」

を見る機会がなかったと思われる。学習者からの返事は書き込まれず、学習支援者とのやりとりは、ここで途絶えている。

表 2 : 「掲示板」の書き込み件数

通信開始からの週	学習支援者 →学習者	学習者→ 学習支援者	教師 (管理人)	合 計
通信開始前	0	0	1	1
最初の書き込みがあった週 11/15～16	4	0	1	5
2 週目 11/17～23	1	6	1	8
3 週目 11/24～30	3	0	0	3
4 週目 12/ 1～ 7	3	3	1	7
5 週目 12/ 8～14	0	3	0	3
6 週目 12/12～21	3	0	0	3
7～8 週目(冬休み)	2	0	1	3
9 週目 1/ 5～11	0	0	1	1
10週目 1/12～18	5	2	0	6
11週目 1/19～25	1	0	0	1
そ の 後	0	0	2	2
合 計	22	14	8	44

冬休みが明けてプロジェクト・ワークの授業が再開すると、プロジェクトで知りあった中学生たちからの書き込みがあった（10週目5件）。プロジェクトに参加した学習者2名が応えている（10週目2件）。

学習支援者からの書き込みは、学習者全員に向けて書かれたものもあったが、多くは一人一人の学習者に向けて書かれたものだった。学習者からの書き込みも多くが個人に向けた書き込みである。通信のほとんどは一对一のやり取りとなり、授業終了後の時間等に学習者が、タイトルが自分宛てになっている書き込みをさがしている様子が観察された。

学習者別にみると、S1が4件、S2が3件、S3が5件、S4が2件の書き込みをしている。その中から、開始時の日本語能力が低く、コンピュータを使ったことがなかったS1と、日本語入力に時間がかかっていたS2のケースを以下に紹介する。

3-2. 学習者S1のケース

S1は、「ネットで自己紹介」を行った時点では、コンピュータを使用した経験がなかった。自己紹介文は「わたしは」と書いたところで止まり、それ以上は書かなかった。授業終了後、コンピュータはやったことがなく難しいと話した。「学生からの発信」には、S1が日本語入力の練習のために別の時間に入力したものを掲載した。

自己紹介文が掲載されると、教師が依頼した学習支援者（以下、J1）からの最初の書き込みがあった。S1の専門に関する質問だった。次の週、教師が「掲示板」を開けて見せると、S1は返事を書くと言った。その週のうちにS1は、J1への返事のことばと専門に関する解説の2つの下書きを書き、それぞれ別の教師に見せてチェックを依頼した。その週の金曜日の授業終了後、教師とクラスメートの助けを借りながら、時間をかけて2つの原稿をJ1宛ての2つの書き込みとして入力した。

4週目、5週目には、その後プロジェクト・ワークで出会った別の学習支援者J2からの書き込みとJ1からの次の質問にも返事を書いた。指導教官に訳してもらったと話していた。必ず手書きで下書きを作ってから入力した。考えることは難しいので入力と一緒にできないと話した。

6週目には、自分宛ての書き込みがないか、休憩時に自分でインターネットのブラウザを開けてチェックしている様子が観察されたが、冬休み直前のJ2の書き込みには、冬休み後も応えることがなかった。

S1が行った書き込みは、合計で4件である。S1の自己紹介文は214字だったのに対し、主に自己の専門について語った「掲示板」の書き込みの平均字数は556字だった。

3-3. 学習者S2のケース

S2は「ネットで自己紹介」を行った時点で、メール・アドレスを持っておりワープロも使えたが、文字入力以外の操作はあまりできないようだった。日本語の文字入力も授業で1回体験していたが、困難を感じているように見え、時間がかかった。自己紹介文は最初、趣味の料理について書こうとしたが、「だめです。」と言って削除し、料理についての語彙や表現を知らないと訴えた。出身地、生年月日、専門、趣味などを書いた短い紹介文を後日教師に提出した。

S2にもJ1からの書き込みがあり、教師は「掲示板」を開けてS2に見せた。J1とS2の通信では、J1から3回、S2から2回、計5回の書き込みが行われた。最初は双方とも出身地、専門、趣味について短く社交的な文を書いたが、テーマは次第におそらく双方の共通の関心事項であると思われる男女の家事の分担の話に絞られていった。J1からの最後の書き込みは冬休み中であり、そこでやりとりが途絶えた。

冬休み後、プロジェクト・ワークで知りあった中学生たちからの書き込みがあり、S2は返事を書いた。また、「ひらがなけいじばん」にS2宛ての書き込みをした中学生J3に対しても、返事が遅くなったことを詫言びて、返事を書いている。

S2が行った書き込みは、「ひらがなけいじばん」に書いたものも含め、全部で4件である。1件目は教師に日本語のチェックを求め、入力や送信の仕方を聞いたが、2件目以降は教師に頼らずに行った。自己紹介文が161字だったのに対し、「掲示板」と「ひらがなけいじばん」の書き込みの平均字数は298字だった。

4. 活動の成果と課題

活動を通じ、学習者は授業終了後の時間などを利用して、学習支援者との通信を行った。授業以外の場面での学習者と学習リソースの接触のデザインとして、電子掲示板による通信活動を設定したことは、効果があったと考えられる。

またこの活動は、学習者の動機にも影響を与えていた。S1とS2は、授業内のタスクとして自己紹介文を書く場面では、「わたしは」だけで止めてしまう、あるいは「だめです。」と言ってあきらめてしまう、といった様子が観察された。自己紹介文として掲載された文章も短い。しかし学習支援者との通信が始まると、最初は教師等の支援を受けながら返事を書き、その後は教師の支援がなくても書き込みをするようになった。書き込んだ文章も、自己紹介文の倍前後の長さである。

動機に影響を与えたひとつの要因は、不特定多数ではない、特定の読み手がいるということであろう。自己紹介文は教師から与えられたタスクであり、ウェブサイトに掲載されたとしても、読者は目に見えない不特定多数の人々である。一方通信の相手は、その自己紹介文を読んだ人であり、興味をもって質問し、メッセージを送ってくれる人である。その人に向けての書き込みは、教師から与えられたタスクとよりも、高い動機を持ってできるにちがいない。学習者は、ブラウザを開けては自分宛てのメッセージがないかチェックしていた。学習支援者とのさらなる通信を期待していたのであろう。

また、S1とS2にとっては、自分たちの専門や関心の高いことに相手が興味を示してくれたことも、動機につながっていたものと考えられる。S2は、自己紹介文で趣味について書こうとしたときにはあきらめてしまったが、J1が男女の家事の分担について書き込みをすると、そのことについての詳しく長い返事を書いた。内容への関心の高さが書くことへの動機となっている。

このようにして、学習支援者との通信は、日本語環境下でコンピュータを使用する学習者の動機を高め、結果的に学習者のスキルを向上させた。学習支援者との一対一の通信が、動機に影響を与えているのである。

しかしながら、一対一の通信が生み出すのは、二人の間の閉じられた関係だけである。学習者は「掲示板」全体に興味を示すというよりは自分宛ての書き込みだけを探しており、「掲示板」の利用者全体がコミュニティを形成することはなかった。このような、個人の記事に対してコメントを書き込む形式の電子掲示板では、ひとつのテーマについて情報を交換しあう電子掲示板と違い、利用者によるコミュニティは形成されにくいと考えられる。

また、今回の活動において学習者と教師以外で書き込みを行ったのは、教師が依頼・呼びかけをした学習支援者と、プロジェクト・ワークで出会った人々だった。その意味でも参加者は閉じられている。

コンピュータ・リテラシーの低い学習者が、日本語入力や電子掲示板での通信を体験してみるという意味では、これは安全に通信できる環境だったといえる。しかしそこで得られるのは、限られた人だけとの交流であり、その中から通信する相手を見つけられないこ

ともあるだろう。日本語能力もコンピュータ・リテラシーも高い学習者S4は、書き込みを2回行っただけだった。S4にとっては、たとえば既存の電子掲示板で参加できそうなところを教師が紹介する方が、学習リソースとの接触やコミュニティへの参加に結びついていくのだろう。学習者が参加できる電子掲示板を探して紹介するというのも、教師にできる学習リソースのデザインである。

フリーの電子掲示板を利用したことは、CGI^{注6}に関する知識と技能のない教師でも電子掲示板を始められるという点でよかった。しかしながら、最新の書き込み10件が表示されるという電子掲示板は、学習者にとって必ずしも見やすいものではなく、冬休みを挟んで最新ではなくなった書き込みは見つけにくかったと思われる。冬休みで通信が途切れた理由は、他にも考えられるかもしれないが、いずれにしても、フリーの電子掲示板の利用は、学習者にとっての使いやすさという点で、最善のものではなかった。教師自身のコンピュータ・リテラシーの向上や技術者との連携も、今後の課題である。

注

1. 似た用語に「情報リテラシー」、「ITリテラシー」がある。領域的に重なる部分のある用語だが、ここでは情報の扱い方に関する知識や技能までは含まず、コンピュータに関する基礎的な知識や技能を含むために、コンピュータ・リテラシーを使う。
2. <http://www.nime.ac.jp/~mana/project/Multimedia-Utilization/2002report.pdf/>
3. <http://homepage3.nifty.com/harienju/student/index.html/> これは一時的なアドレスなので、アクセスできない場合はお問い合わせを。
4. 書き込みはすべて「学生からの発信」に『『掲示板』過去ログ前半』、『『掲示板』過去ログ後半』、『『ひらがなけいじばん』過去ログ』として掲載された。
5. 広告等の書き込みは、平成15年度前期の「2003年前期Bクラス掲示板」で非常に多かった。学習者が「友だちを作りたい」と書き込んだところ、出会い系サイトからの「友だちが作れる」という書き込みが激増し、教師はその削除に追われた。
6. Common Gateway Interface

参考文献

- 石井恵理子 岡部真理子 下平菜穂 富谷玲子 2003 「学習リソースの再検討：日本語学習の多様性を読み解くためのフレーム作りに向けて」『第2回日本言語政策学会研究発表会〈資料〉』
- 田中望 齋藤里美 1993 『日本語教育の理論と実際－学習支援システムの開発－』大修館書店
- Lave, J. 1993 The practice of learning. In S. Chaiklin and J. Lave (eds.) Understanding practice. Cambridge: Cambridge University Press.